

## A-10

## 新カリキュラムにおける初修外国語教育の基本方針とその成果

## —中国語科目の場合—

## The basic policy and its results of the second foreign language education in the current curriculum

## In the case of the Chinese subject

○郭海燕<sup>1</sup>, 周一川<sup>1</sup>, 道川典子<sup>1</sup>\* Haiyan Guo<sup>1</sup>, Yichuan Zhou<sup>1</sup>, Noriko Michikawa<sup>1</sup>

With the enforcement of the new curriculum, the Chinese subject was changed from the required elective subject to the free choice subject. The second foreign language laboratory produced three pillars as education content. (1) To set attainment targets based on foreign language Proficiency tests. (2) To build available e-Learning systems for all the learners. (3) To make new courses in connection with cross-cultural understanding. This report settled how a Chinese subject enforced the contents.

## 1. はじめに

平成 20 年度に新カリキュラムの実施に伴い、中国語科目を含む初修外国語科目は必修選択科目から自由選択科目に変更された。これにより、受講者の減少や在学中に英語以外の外国語を履修せずに卒業する大学生が増加する懸念が生じた。このような状況に対して初修外国語研究室は、「e-Learning」、「言葉と文化」、「検定試験」という内容を初修外国語教育の三本柱(以下、教育三本柱)として改めて制定した。本報告は、平成 20 年度から 24 年度の 5 年間に於いて中国語科目が実施する過程、効果及び問題点をまとめたものである。

## 2. 実施内容

## (1) 教育内容の明確化

教育三本柱の制定を契機に、またそれを実現するために、中国語科目はまず対面授業用の統一教科書の作成に乗り出した。平成 19 年度まで、本学部の中国語科目の教科書は、科目担当教員の各自の判断で市販の教材から選別したものであった。そのため各クラス(前期・後期を合わせて年間 75 クラス前後、1 クラスの受講者数は約 50 名)の学習内容、難易度がそれぞれ異なっていた。これは受講者を戸惑わせるばかりではなく、教育の観点からも決して好ましいことではない。更にこのような状況は、中級中国語教育にも不都合であった。これは、中級クラスの受講者は学習内容が異なった各初修クラスから集まった学生であり、そのスタートラインが不揃いであるため、中級クラスの授業の進行が難しくなってしまうからである。そこで平成 20 年度から中国語文法 I・II において統一教科書を使用し始めた。

これにより、本学部における各担当教員任せの教科書による学習内容・学習進度・試験難易度の不揃いと不都合は克服され、本学部における教育三本柱を実現する土台が築かれたのであった。

## (2) 教育目標の明確化

教育三本柱の「検定試験」とは、中国語検定試験を指す。中国語科目は平成 20 年度から統一教科書を使用し始めたと同時に、教育目標もより明確にした。これにより中国語検定試験の資格取得を対面授業の学習目標の一つに制定した。ここで、本学部の学生が初修中国語科目を選択するのは、殆ど一年生の時期であることと、理工系の実験が多く中国語の学習時間が少ないことを考慮した結果、初修中国語科目は検定試験の高いレベルの級を目指すのがほぼ不可能であるため、準 4 級の合格を目標にした。これに伴い、学部要覧に初修中国語教育の目標の一つは準 4 級であることを新たに記述した。同時に中国語中級科目も 4 級を目標とした。このように、教育三本柱の「検定試験」に関する具体的な内容を明確にしたことにより、本学部の中国語教育は受講者に対し、より分かりやすい授業内容と学習目標を示すことができた。このことは、さらに受講者の注目と学習意欲を引き起こすことになる。

## (3) 本学部に於ける中国語教育の「e-Learning」

本学部の中国語教育の受講者数が多く個別指導では対応しきれないこと、また理工系の実験が多いため中国語学習時間の不足や「検定試験」向けの学習環境の不備などを解決するには、対面授業用の統一教科書のほか、受講者がいつでもどこでもパソコンがあれば、自分の都合により中国語学習ができる教材が欠かせないと考えた。

そこで e-Learning による「初級中国語講座」、「中級中国語講座」と「中国語検定試験対策教材」を作成することにした。「初級中国語講座」には<発音編>(発音の基礎から統一教科書に含められない練習問題などを含める)、<本文編

I > (12 課あり前期内容に相当するもの), <本文編Ⅱ>, <本文編Ⅲ> (それぞれ 12 課あり中級中国語の内容とする) と <豆知識> (中国歴史, 伝統文化などを紹介する) から構成した。「中国語検定試験対策教材」は, <準 4 級検定試験練習問題 100 問 (基礎文法編)>, <準 4 級検定試験模擬試験 100 問 (実践編)>, <準 4 級検定練習問題 (リスニング)>, <準 4 級検定練習問題 (筆記)>, <準 4 級検定模擬試験 (リスニング)>, <準 4 級検定模擬試験 (筆記)>, <準 4 級検定試験模擬試験>, <4 級検定練習問題 (リスニング)>, <4 級検定練習問題 (筆記)>, <4 級検定模擬試験 (リスニング)>, <4 級検定模擬試験 (筆記)>, <4 級検定模擬試験 (長文)> から作成した。現在までに, 「初級中国語講座」と「中級中国語講座」の 36 課と「中国語検定試験対策教材」準 4 級と 4 級を合わせて全 540 の練習問題や模擬問題は, 情報センターの HP で公開しており, 本学部の学生であれば無料で利用できるようにした。これらの e-Learning による中国語教材は, すべての練習問題に対し, 関連文法事項と語彙に関する詳細な解説と解答を含めたため, 正否の確認ができるだけでなく, 自習文法書として使用し易いものとなった。

これらにより, e-Learning による中国語教材の開発と利用により, 自習体制が完備され, 受講者の中国語学習時間の不足や検定試験学習教材の不備を解決でき, 教育三本柱の実現が可能になった。

#### (4) 準四級の合格に向けて

平成 21 年度の 5 月に, 中検協会と本学部間で, 委託会場 (11 月のみ) の開設に関する契約を成立させ, 船橋校舎に中国語検定試験委託会場を開設することができるようになった。これを以て平成 21 年度の 11 月から今日に至って検定試験を計 4 回実施した。現在, 本学部の受講者は, 希望すれば船橋校舎に開設した委託会場で受験できるようになった。これより, これまでの大学の基礎教育としての中国語科目は, 本学部一般教育教室の資格支援科目としても位置付けられた<sup>1)</sup>。

準会場設置のほか, 毎年検定試験実施する前に講習会を開講している。受講者に対する受験直前の集中指導のため, 10 月の検定試験申込の締め切り前と後の 2 回実施している。講習会は本学部のコンピューター演習室で行い, 講習会用として教員が新たに作成した準 4 級「検定試験復習ポイント」, 「簡体字一覧表」, 「日常挨拶」などの資料を参加者全員に配布している。これら資料は受験ポイントを押さえた内容になっており, 受講者が資格取得への実現に繋がるであろう。

### 3. 効果

今回の改善により, 次のような効果が得られた。

- ①新カリキュラムの変更に伴い, 教育三本柱の制定により中国語受講者数は減少することなく, 年間 800~1000 人余りであった。
- ②準会場設置後, 2012 年までの 4 年間で準 4 級合格者人数は 1200 人以上に上った (準会場以外の合格者を含めず)。受験者数も教育三本柱を実施する以前より大幅に増え, 合格率は年々上昇し, 2009 年当初 64.6%であったのに対し昨年度は 83.0%と上昇し, 昨年度の全国平均 76.2%より上回った。
- ③e-Learning の<豆知識>により受講者は中国文化などに触れた機会が増えたことで, 中国語学習により一層の興味を示している。

### 4. 問題点と展望

教育三本柱の「文化と言語」の充実及び「検定試験」4 級の対応が今後の課題としてまだ残されており, 新たな対策が必要である。この二つの充実の実現により, 本学部の中国語教育の初級, 中級はより一層の教育効果が期待される。

### 5. 参考文献

- [1] 周一川: 「スキルアップを目標とする中国語教育の試み—検定試験の導入と e-Learning による検定試験対策教材」, 日本大学理工学部一般教育彙報, Vol.88, pp.13-22, 2010
- [2] 郭海燕: 「初心者に学習しやすい中国語 e-Learning 教材」, (法) 私立大学情報教育協会『論文誌 IT 活用教育方法研究』, 第 10 巻, p.1-5, 2007